

I 研究主題と主題設定の理由

1 研究主題

「ともに学び、自己を高める生徒を育成する教育課程の編成」

2 研究主題設定の理由

(1) 社会の情勢と教育の動向から

21世紀は、社会のあらゆる領域で、新しい知識・情報・技術が活動の基盤として飛躍的に重要性を増す知識基盤社会の時代であると言われている。一方では、少子・高齢化、都市化や核家族化が進み、地域社会においては交流の希薄化、家庭におけるしつけや教育力の低下が指摘されている。

また、教育においても学習指導要領の改訂が示されたが、これまでの「生きる力」を育むことの重要性は引き継がれており、よりいっそう「確かな学力」「豊かな心」「健やかな体」の育成が重視されている。

このような状況において、自己責任を果たし、自分と異なる側面をもつ他者を受け入れ、よりよい人間関係を構築しながら一定の役割を果たすためには、基礎的・基本的な知識や技能を習得することが必要である。そして、それらを活用し、自ら見いだした課題を解決するための思考力・判断力・表現力を高めていくことが大切である。

そこで、変化の激しいこれからの社会にあって、他とかがわり合いながら、自ら考え、主体的に判断し、行動できる生徒の育成を目指し、知・徳・体のバランスのとれた教育活動を展開していく必要があると考える。

(2) 本校の特性及び生徒の実態から

本校は、平成18年度に、鹿児島玉龍高等学校を母体とした、併設型中高一貫教育校として開校した。6年間のゆとりある学校生活の中で、計画的・継続的な教育指導及び幅広い異年齢集団活動等を展開することを目指し、以下の3つの視点をもって教育活動に取り組んでいる。

- 真の学力の向上
- 豊かな人間性の育成
- 国際性の育成

本校の生徒は、明るく素直な生徒が多く、授業や学校行事・部活動などに積極的に取り組む姿がみられ、男女の仲もよく、お互いを理解し合いながらよりよい学校生活を送りたいという意欲の高さもうかがえる。しかし、生徒の置かれた状況をみると、鹿児島市内のそれぞれの小学校から入学しており、これまでの学校生活や地域での交流を重ねてきた仲間と離れ、本校で新たな人間関係を確立していく必要がある。また、高校生と合同で取り組む文化祭・体育祭など大きな行事では、企画・運営を高校生が中心となりながら、中高生が合同で創り上げている。

このような中で、人間関係が広がり、他者と積極的にかかわろうとする姿が見られる反面、自分の考えや思いを上手く伝えながら、仲間と十分議論することを苦手としたり、学習や係活

動でうまくいかなくなると自分の考えや思いを仲間や教師に伝えることなくあきらめたりする生徒も少なくない。

そこで、他とのかかわりを充実させ、生徒一人一人が自ら学び、考えるなど主体的な学習を展開していくことが必要であると考えた。ここでいう他を「人・もの・こと」ととらえ、生徒に「人・もの・こと」とのかかわりを充実させる取組を工夫していくことで、生徒一人一人が自分のよさや可能性に気づき「自己効力感」「なりたい自分・できそうな自分への志向」をもつことや他者の立場や視点を理解し、「違いは違い」として認め合うことができるようになる。具体的には、学習形態、高校の教師や生徒といった人材活用など授業における場を工夫することで、他者とのかかわりの充実を図るという視点や体験活動・学校行事・施設などやICTの活用といった「もの・こと」とのかかわりを充実させるという視点をもって、教育課程の編成を進めていくことが大切である。

以上のことから、様々な「人・もの・こと」とかかわる中で、自己のよさを発揮していく生徒を「ともに学び、自己を高める生徒」ととらえ、その育成を図ることとした。また、そのためには、本校の教育活動全体を再検討し、教育課程を編成していくことが必要であると考え、「ともに学び、自己を高める生徒を育成する教育課程の編成」を研究主題に掲げ研究を進めていくことにした。

II 研究仮説

生徒の実態を踏まえ、中高一貫教育校の特性を生かした教育課程を編成し、他とのかかわり合う場を充実させることにより生徒一人一人の学びを深める工夫をすれば、ともに学び、自己を高める生徒を育成することができる。

III 研究の視点

- 1 中高一貫教育の特性を生かした教育課程の編成
- 2 生徒の実態をとらえ、本校の課題を明確にし、「ともに学び、自己を高める生徒」を育成するという視点に立った各教科・領域の指導法の工夫

IV 研究の概要

1 中高一貫教育の特性を生かした教育課程の編成

(1) 教育課程の編成における基本的な考え方

本校の教育理念である「真の学力の向上」「豊かな人間性の育成」「国際性の育成」を具現化するために、中高一貫教育校の特例措置（中学校と高等学校の各教科や各教科に属する科目の内容のうち、相互に関連するものの一部を入れ替えて指導することができる。高等学校の指導の内容を移行させて指導することができる。）を踏まえ特色ある教育活動の展開を目指し、教育課程の編成を次のような課題をもって取り組むことにした。

- 1 新学習指導要領の平成 24 年度全面実施へ向けた移行期間としての時数配当をどのようにするのか。
- 2 中高一体となった教育活動を展開するにはどのような教育課程を編成すればよいか。
- 3 2 学期制を試行し、効果的な教育活動を展開するにはどのようにすればよいか。

これらの課題を解決していくためには、学校行事や施設・設備の活用など中高一貫教育校として、中高の連携を図りながら教育課程の編成を進めていくことは当然であるが、各教科・領域の指導法の工夫・改善に努めるとともに、指導計画の見直しもしていかなければならない。

(2) 教育課程編成の実際

ア 移行措置期間における授業時数

授業時数の増加と追加された指導内容へ適切に対応し、平成 24 年度の全面実施に向けて円滑に移行できるようにするとともに、本校の教育理念や高校からの要望、中高一貫教育校の特例措置にある「高等学校の指導の内容を移行させて指導することができる。」といった内容を踏まえ、国語、社会、数学、保健体育、英語、選択教科においては標準時数より多く設定し、効果的かつ十分な指導が図られるよう努めた。(図 1)

		国語	社会	数学	理科	音楽	美術	保体	技家	英語	その他	年間	
H 21	1 年	標準	140	105	140	105	45	45	90	70	105	135	980
		玉龍	140	105	175	105	45	45	105	70	140	155	1,085
	2 年	標準	105	105	105	105	35	35	90	70	105	225	980
		玉龍	105	105	140	105	35	35	105	70	140	245	1,085
	3 年	標準	105	85	105	105	35	35	90	35	105	280	980
		玉龍	128	105	140	105	35	35	105	35	140	280	1,108
H 22	1 年	標準	140	105	140	105	45	45	90	70	105	135	980
		玉龍	175	105	157	105	45	45	105	70	140	155	1,102
	2 年	標準	105	105	105	140	35	35	90	70	105	190	980
		玉龍	118	105	152	140	35	35	105	70	152	190	1,102
	3 年	標準	105	85	140	105	35	35	90	35	105	245	980
		玉龍	123	105	140	105	35	35	105	35	140	297	1,120
H 23 (予定)	1 年	標準	140	105	140	105	45	45	90	70	105	135	980
		玉龍	162	105	162	105	48	48	105	70	162	155	1,122
	2 年	標準	105	105	105	140	35	35	90	70	105	190	980
		玉龍	140	105	153	140	35	35	105	70	162	197	1,142
	3 年	標準	105	85	140	140	35	35	90	35	105	210	980
		玉龍	140	140	162	140	35	35	105	35	162	210	1,164

図 1 移行措置期間中における授業時数の推移

標準時数より多く設定した教科において、標準を超えた時数の取り扱いに関しては図2のようになっている。国語に関しては、表現力や長文読解力を高めることに重点を置いた指導を行っている。社会・数学に関しては、特例措置を踏まえ、1つ上の学年の学習内容や高校の内容を先取りして指導している。英語に関しては、高校の学力の実態を踏まえ、長文読解の力を高めることに重点を置き、長文読解演習等に時数を費やしている。保健体育に関しては、高校で実施する種目を踏まえ、中学生の時期に様々な種目を全ての生徒に十分に時間をかけて指導するという視点で球技や陸上競技、器械運動等の各単元に時数をかけている。

教科	標準時数を超えた時数の取り扱い	
国語	1年生	表現力を高めるために、正しい原稿用紙の使い方から、構成や文章表現の工夫、推敲の仕方まで、自作のワークシートを使って取り組んでいる。
	2年生 3年生	長文読解力を高めるために実力錬成テキストを使用し、演習・解説等を行っている。
社会	3年生	各分野（地理・歴史・公民）の高校内容のガイダンスを行っている。 ※地理的分野・・・地形について ※日本史分野・・・戦国時代について ※世界史分野・・・世界の宗教について
数学	1年生	2年生の内容の式と計算、連立方程式、高校内容のガイダンスを行っている。
	2年生	高校内容の順列・組み合わせの利用や3年生の内容の相似な図形、多項式の計算と因数分解の時間を設定している。
保健体育	1年生 2年生 3年生	球技・陸上競技・器械運動等を中心に、各領域の多くの運動種目の基礎的・基本的知識や技能の習得を目指して、各単元の時数を多めに設定している。
英語	1年生 2年生	表現力を高めるために、身近な題材を用いて前時の学習内容を深化・発展させる時間を設定している。 長文読解力や文法の定着に向けてた演習の時間を設定している。
	3年生	長文読解力を高める為に、長文読解用のテキストを活用し、演習・解説を行っている。また、語彙力や文法力を伸ばすために単語テキストや基本文例600等活用した演習の時間を多めに設定している。

図2 各教科の標準時数を超えた時数の取り扱い

イ 授業時数の確保

各学年とも必修教科の時数を増やし、基礎的・基本的内容の確実な定着とともに、高校の学習内容との継続性を図るには授業時数を確保することが必要である。

そこで、7限授業の実施と単位時間の弾力的な運用、長期休業期間中における授業日の設定により、週33時間（第3学年は8月以降に週34時間）、年間授業時数1102時間（第3学年は、年間授業時数1120時間）を確保することができた。

月曜日		火～金曜日	
M & M	8:10～8:20	M & M	8:10～8:20
職員朝礼	8:20～8:27	職員朝礼	8:20～8:27
全体朝礼	8:30～8:45	朝の会	8:30～8:40
1校時	8:55～9:45	1校時	8:45～9:35
2校時	9:55～10:45	2校時	9:45～10:35
3校時	10:55～11:45	3校時	10:45～11:35
4校時	11:55～12:45	4校時	11:45～12:35
昼食	12:45～13:30	昼食	12:35～13:20
清掃	13:30～13:40	清掃	13:20～13:30
5校時	13:45～14:35	5校時	13:35～14:25
6校時	14:45～15:35	6校時	14:35～15:25
帰りの会	15:40～15:50	7校時	15:35～16:25
		帰りの会	16:30～16:40

※水・金は、6校時終了後帰りの会（15:30～15:40）

図3 校時表

(7) 7限授業の実施

1単位時間を50分とし、全学年で週2日の7限の授業（第3学年は8月以降に週3日の7限の授業）を実施している。平成22年度実施の校時表については図3に示す通りである。本校は、高校と校時を統一したことで、給食指導の時間がなく、給食がある場合の6限終了時刻と同じような時間で7校時まで実施が可能である。高校は月曜日を除く週4日が7限授業であるが、中学生の発達段階を考慮して、7校時の実施は週2日としている。3年生の8月以降は、週3日実施している。

(イ) 単位時間の弾力的運用

単位時間を弾力的に運用した授業の実践として、50分を朝の10分間、週5日間に分けて実施することで、50分授業の1コマにカウントした。1週間の時間割上のコマ数としては図4に示す通りである。朝の10分間を活用し、効果的かつ十分な指導を行っていくという視点から図5に示したねらいに基づいて年間指導計画を作成した。1週間の学習内容は、週行事予定表に記載

	月曜日	火曜日	水曜日	木曜日	金曜日
10分間	M&M	M&M	M&M	M&M	M&M
1校時					
2校時					
3校時					
4校時					
5校時					総学
6校時					総学
7校時		学活		創意	

1週間32コマ+1コマ(M&M)=33コマ

図4 1週間の時間割のコマ数

し、生徒と教師が学習内容を事前に確認できるようにしている。この実践は、「マス&モーニングイングリッシュシャワー(M&M)」と名付けて、英語のリスニングや数学の計算を中心とした基礎的・基本的内容の定着を図るために設定した学校選択教科として全学年で実施している。

【1年生】	正・負の数の計算や文字式の計算ができる。 一次方程式や連立方程式を解くことができる。 平面図形や空間図形の基本的な用語や各要素を理解できる。 比例・反比例の意味を理解し、式やグラフをかくことができる。 話されるまとまった英語の情報を聞いて、話の内容を理解することができる。
【2年生】	基本的な図形において、図形の性質を理解できる。 一次関数の意味を理解し、式やグラフをかくことができる。 確率の意味を理解し、様々な事象における確率を求めることができる。 話されるまとまった英語の情報を聞いて、話の内容を理解することができる。
【3年生】	多項式や平方根の計算及び因数分解ができるとともに、方程式を解くことができる。 円周角の定理と三平方の定理を活用することができる。 2乗に比例する関数において、式やグラフをかくことができる。 話されるまとまった英語の情報を聞いて、話の内容を理解することができる。

図5 M&Mにおける各学年ごとのねらい

この学校選択教科は、本校の教育理念にもある「国際性の育成」や生徒の実態、高校からの要望を踏まえ、「数学における基礎的・基本的な内容を理解させるとともに、英語を聞くことで、英語に対する興味・関心を高め、聞く力を伸ばす。」という目標を設定し、取り組んでいる。具体的に英語では、リスニング用のテキストを使用し、数学では、計算練習テキストや教科で作成した自作のプリントを用いている。この時間の指導者は、各学級の担任があたり、リスニング等の補助として、各学年の副担任で放送を流すなど、全職員で取り組んでいる。

(り) 長期休業期間中における授業日の設定

長期休業期間中に授業日を設定し、効果的に体験的な活動ができるような集団宿泊学習等を実施した。1年生では、夏季休業期間中に「さつま町観音滝公園」で、川遊びやそば打ち、ガラスカットを体験する日帰りのサマー教育デイキャンプを実施した。2年生では、夏季休業期間中に霧島で、中岳・新燃岳登山や、霧島自然ふれあいセンターでの宿泊、その周辺の自然散策などを体験する1泊2日のサマー教育キャンプ実施した。3年生では、秋季休業期間中に学校の宿泊施設を利用して、2泊3日のオータムスタディースクール（宿泊を伴う勉強合宿）を実施した。

ウ 中高一体となった教育活動

中高の6年間で生徒を育成する視点から中学1・2年生を基礎期、中学3年生と高校1年生を充実期、高校2・3年生を発展期と位置づけ、中学と高校の生徒や教師の交流、行事の中高合同実施等を行ってきた。その中で、特に中学3年生の後期を高校での学習の準備段階ととらえ「高校0(ゼロ)学期」として進学に対する意識を高めさせ学習に取り組ませている。

(ア) 中学校・高校教員の交流

高校における各教科の履修内容を踏まえ、中学校段階において高校を見通した指導計画の作成に努め、高校教員による授業や高校の授業内容の先取りをすることで、学習の効率化や授業の質の向上を図るとともに生徒の学習意欲の向上を図っている。表に示した

中高教員の交流一覧

教科	学年	交流する時期と人数	教科	学年	交流する時期と人数	
国語	中学2年生	年間を通して高校から1名	保健体育	中学1年生	年間を通して高校から2名	
社会	中学1年生	年間を通して高校から2名		中学2年生	年間を通して高校から2名	
	中学3年生	2月~3月に高校から3名		中学3年生	年間を通して高校から2名	
	高校1年生	年間を通して中学から1名		高校1年生	年間を通して中学から1名	
数学	中学2年生	年間を通して高校から1名		高校2年生	年間を通して中学から1名	
	中学3年生	年間を通して高校から1名		高校3年生	年間を通して中学から2名	
	高校1年生	年間を通して中学から1名		芸術選択	中学3年生	年間を通して高校から2名
英語	中学2年生	年間を通して高校から1名		数学選択	中学3年生	年間を通して高校から3名
	中学3年生	年間を通して高校から1名		日本文学	中学3年生	年間を通して高校から1名
	高校1年生	年間を通して中学から3名	自然科学	中学3年生	10月~3月に高校から4名	

ようにほとんどの教科で中学校と高校の教員の交流を行っている。

中学の教員にとっては、高校で授業をし、学習内容を知ること、高校入試ではなく、大学入試を見据えた学習内容を踏まえた指導を中学生に行うことができるようになってきた。また、高校の教員にとっても、中学校の教員と教科部会等での細かい打合せなどを通して、指導の細やかさに気付き、授業時の支援や援助を丁寧に行うようになるなど中学校と高校の教員の交流を通して、指導者としての教師にとっても、授業を受ける生徒と共にプラスになる点が多く見られた。

(イ) 異年齢集団の交流

鹿児島に伝わる縦割り教育「郷中教育」のように先輩が後輩に学習指導をすることを通して、異年齢の交流と学習意欲の高揚を図る取組を「玉龍郷中^{ごじゅう}」と名付け、玉龍高校を卒業した大学生や現役高校生が中学生に、中学3年生が中学1・2年生に学習指導を行った。その中で数学を中心に実施している「郷中タイム」での学習形態としては、下に示すとおりである。

指導する学年	指導される学年	学 習 形 態
高校2年生	中学3年生	1班4名に対して指導者1名
高校1年生	中学1・2年生	1班4名に対して指導者1名
中学3年生	中学1年生	1班4名に対して指導者1名
中学3年生	中学2年生	1班4名に対して指導者1名

指導者としての高校生や中学生へは、事前に学習するプリントを配布し、生徒がつまづきそうなポイントや指導の観点等を指導した。また、教えてもらう対象となる生徒には、事前に教わる際の態度や言葉遣いなどを担任が指導してから取り組ませた。郷中タイムの様子は図6に示す。



図6 郷中タイムの様子

異年齢集団の最たるものに部活動があるが、中高の部活動が毎日同じ場で展開され、中学生にとって、間近でレベルの高い高校の部活動に触れることは大きな利点である。さらに、中学3年生においては、高校入試がないことから、夏休みから高校部活動への参加が可能になっている。

学校行事は、入学式、文化祭、鹿児島玉龍高校と鹿児島中央高校との交流戦応援、体育祭、長距離走大会など、多くは中高合同で実施し中学1年生から高校3年生までの幅広い年齢層が場を共有している。中高合同で実施する学校行事については図7の通りである。

月	行 事 名
4月	新任式、始業式、入学式、対面式 部活動紹介、玉中戦応援練習、玉中戦
5月	勤学祭、避難訓練、生徒総会
6月	文化祭
9月	体育祭全体練習・予行、体育祭、終業式
10月	始業式
11月	芸術鑑賞会、愛校作業、避難訓練
12月	長距離走大会
3月	修了式、離任式

図7 中高合同行事

(ウ) 6年間を見通した進路指導

各学校で実践されているキャリア教育に加え、キャリア教育プロジェクトとして、鹿児島大学、九州大学、東京大学等との連携講座を実施している。1年生では、鹿児島大学での講座を受講したり、2年生では、九州自主研修（1泊2日）において、九州大学伊都キャンパスを訪問し、大学教授の講義を受講したりしている。研究室等も大学生が案内役として引率し、各研究室で行われている実験を見ることもできた。（図8）

3年生では、修学旅行（3泊4日）において、東京大学本郷キャンパスを訪問し、大学教授の講義を受講（図9）したり、学内を散策し様々な施設を見学したりする機会を得た。



図8 九州大学の研究室にて



図9 東京大学で講義を受講する生徒

また、3年生の修学旅行では、生徒が自ら訪問したい関東の大学や企業を選択し、事前学習から当日の訪問まで研修を重ね、充実した時間を過ごすことができた。これまでに訪問した大学や企業の一覧表（図10）に示す。

このような体験の積み重ねで、生徒の意識の中には、高校を卒業したら、これらの大学で学びたいという思いを強くもつ生徒も現れ、学習意欲の高揚につながっている。

1年生	鹿児島大学農学部		特別講座
2年生	鹿児島大学工学部		特別講座
	九州大学・熊本大学		九州自主研修
3年生	鹿児島大学法科大学院		特別講座
	大学一覧		
	東京大学	東京工業大学	一橋大学
	東京学芸大学	筑波大学	お茶の水女子大学
	早稲田大学	慶応義塾大学	明治大学
	立教大学	上智大学	法政大学
	企業等一覧		
	株式会社永谷園	持田製薬株式会社	キリンパレヅ株式会社
	A N A 整備工場	日清製粉株式会社	アスクル株式会社
	学校図書株式会社	株式会社小峰書店	株式会社WAVE出版
	トレントマイカ株式会社	サイバーステップ株式会社	株式会社アイ・エヌ・エー
	株式会社明光商会	株式会社長大	株式会社大気社
	国土交通省	株式会社日立ビルシステム	グリーン購入ネットワーク
	警視庁本部庁舎	国立極地研究所	公正取引委員会
	日本銀行・貨幣博物館	読売新聞東京支社	東京証券取引所
	国会議事堂	財団法人ユニセフ協会	造幣局東京支局
	日本ユニバーサルデザイン研究機構		NHKスタジオパーク
	防衛省	花王東京工場	朝日新聞社
	財団法人日本フォスター・プラン協会プラン・ジャパン		

図10 訪問した大学、企業等一覧

進路指導に関しては、高校には進路指導室があり、中学校からも進路指導主任をはじめ各学年の進路指導担当者が中高同じ進路指導室に在籍している。中学教員が高校の進路指導部会にも同席することで、中高合同で学力分析会を実施したり、高校の情報や取組を共有したりするなど、6年間を見通した進路指導の充実が図られている。

中高の教師が同じ部屋にいることは、生徒にとっても中高どちらの教師にも進路相談をしやすい環境になっている。

(エ) 6年間を見通した総合的な学習の時間

本校では、6年間の総合的な学習の時間を通して、「読み取る力」「計画立案能力」「探求する力」「コミュニケーション能力」の育成を目指している。高校において「地球規模でものごとを考えて行動しようとする精神（グローバルマインド）」をもつ生徒の育成を目指すというねらいを踏まえ、中学校においては、学年の発達段階に応じて、「郷土の歴史、文化等について理解を深めさせながら郷土のために行動しようとする精神（ローカルマインド）」をもち、自己の生き方について広い視野で考えようとする生徒を育成しようとして取り組んでいる。中高におけるこのような取組を、地域社会から地球規模の視点で考え行動しようとする精神・意欲を表す造語として「グローバルマインド」とし、6年間を通して計画的に進めていく上で「グローバルマインド・プロジェクト」と名付けて実践している。

中学校では、郷土学習を「かごしま学」と名付け、校外での自主研修や出前授業を利用しながら鹿児島への理解を深めさせている。

エ 2学期制における教育活動の展開

本校教育理念にもある「真の学力の育成」や中高一貫教育校としての特殊性を踏まえ、より効果的な教育活動が展開されなければならないことから、2学期制を試行し、教育課程の編成を進めてきた。生徒の学習意欲を維持・向上させる上で、前期に定期考査を2回、総合考査を1回と後期に定期考査を3回、総合考査を1回実施している。教師の考査作成の負担は若干あるものの、保護者も短い期間で子どもの学力を把握できるので安心できるようである。2学期制と3学期制の考査の回数や時期の違いについては右の表の通りである。

また、2学期制では、通知表が2回になるため、成績連絡表や学

二 学 期 制			三 学 期 制		
期	月	行 事	行 事	期	月
前 期	4	前期始業式	始業式	4	一 学 期
	5	前期考査①	中間考査	5	
	6	前期考査②	期末考査	6	
	7	夏季休業開始 21日	夏季休業開始 21日	7	
	8	夏季休業終了 前期総合考査 23日	夏季休業終了 31日	8	
後 期	9	前期終業式 28日 秋季休業開始 29日	始業式 1日	9	二 学 期
	10	秋季休業終了 6日 後期始業式 7日 後期考査①	中間考査	10	
	11	後期考査②	期末考査	11	
	12	後期考査③ 冬期休業開始	冬期休業開始	12	
	1	冬期休業終了	冬期休業終了	1	
	2	後期総合考査	期末考査	2	
	3	修了式	修了式	3	

年・学級通信によって生徒の学習状況や学校生活の様子を家庭と共有できるよう努めている。さらには、生徒の学習面の対策や生活面の悩みを学級の枠を越えて、担当の職員が個別に指導・支援にあたるチューター制を取り入れ、各学年の実態に応じて形態を工夫しながら取り組んでいる。各学年の取組は次の通りである。

チューター制の取組状況

- 【1年生】 10名程度の生徒を副担任が分担し、学力差が大きくなりやすい数学を中心に、指導・支援を行っている。同時に、「生活の記録」や「宅習帳」のチェックをしたり家庭学習のアドバイスをしたりしている。
- 【2年生】 生徒にアンケートを実施し、強化したい教科を生徒自身が選択する。学年部所属の職員で担当教科を分担し、選択した教科の宅習を中心に指導・助言をおこなっている。生徒のアンケート結果を優先するので各教科によって人数はそれぞれである。
- 【3年生】 学級単位で担任と副担任が20名ずつの生徒を分担し、日々の宅習チェックや定期考査後の学習の指導・助言、及び生活面に関する相談を受けている。

さらに、中学3年生には、「高校0学期」という意識をもたせるために秋季休業中に、本校の宿泊施設「育龍館」を利用し、宿泊を伴う勉強合宿を実施している。この勉強合宿は「オータムスタディースクール」と名付け、国語、社会、数学、理科、英語を中心に基本問題や発展問題を通して学習意欲の向上と家庭での学習習慣を見直す機会とし学力の向上を図っている。

2年間、2学期制を試行した結果、2学期制は中高一貫教育校という特殊性を持つ本校の実態に即しており、授業時数の確保と教師のゆとりを生み出すことで多くのメリットをもたらしてくれた。以下にメリットとデメリットを示す。

【2学期制のメリット】

- 通知表が9月と3月の2回となるため、夏季・冬季休業の前に教師の時間的な余裕が出て、生徒個々への指導に時間をかけることができる。
- 秋季休業中に3年生のオータムスタディースクールで1日10時間のまとまった学習をさせることにより、高校に向けての学習への意欲付けを図ることができる。
- 秋季休業を市郡スポーツ教室の開催時期に当てることで、生徒・教師が欠けて自習になったり、授業進度に遅れが出たりすることがなくなり、授業時数の確保につながる。
- 秋季休業に、授業にとらわれることなく効率的に学校説明会や入学者選抜の準備をすることができる。
- 秋季休業以降を中学3年生においては「高校0学期」ととらえさせることにより、適切な時期に高校進学への自覚を持たせることができる。
- 夏季休業の終わりを早めることにより8月下旬から体育祭（9月第2土曜日実施）の練習ができるため、9月初旬のあわただしさが改善され行事と学業の両立が図りやすくなる。
- 夏季休業中の研究や作文、製作品等の頑張りを、通知表の評価として早い時期（9月）に示すことができ、学習意欲の高揚につながる。

【2学期制のデメリット】

- 8月後半の校外行事が、授業日と重なり出席しにくいものがあった。
（例）市教育講演会、市生徒指導主任・担当者研修会、市英語教育講座 等
- 長期休業明けと学期スタートが重ならないため、節目をつけにくい。

2 「ともに学び、自己を高める生徒」を育成する指導の工夫

(1) 学び合う場の設定（「人」とのかかわり）

「学び合い」とは他者とかかわり合って学ぶことであり、学習者の内面において他者の存在を強く意識させることが大切である。そのためにも、学習過程のいずれかの段階で他者の考え方を受け入れ、自分の中で他者の考え方について吟味する場がなくてはならない。さらには、自らの考えを表現し、相互に練り上げることが学び合いであると考えている。ペアやグループで話し合わせれば、相互の練り上げができるというもではない。そこには、「人・もの・こと」とのかかわりを重視した授業の展開が必要であると考えている。

(2) 「もの」とのかかわりを重視した授業の展開

学び合いを充実させるための「もの」とのかかわりとして、下に示すのはICTを活用した教科の具体例である。

- 立体の切断のシミュレーションをデジタルTVに写し、生徒一人一人に立体の切断面のイメージを具体的にもたせ、相互練り上げの活動を活性化させる。【数学科】
- 価格と需要・供給曲線の動きをデジタルTV画面上でシミュレーションすることで、価格の決まり方について論理的に説明するための視点をもたせる。【社会科】
- ワークシートに記述された職業と学問の関連図を教材提示装置を活用して全体に示すことで、個々の意見を効率的に学級全体で共有化し、意見交換の活性化を図る。【学級活動】

この内容は、主に教師が機器等を操作しているものであるが、生徒自身が直接機器を操作し、情報収集やグラフの作成、プレゼンテーションの作成をするなどの授業も各教科で展開されている。

(3) 「こと」とのかかわりを重視した授業の展開

他者とかかわりを含む体験的な活動を中心に学級活動・道徳・総合的な学習の時間と関連させて一つのまとまり（ユニット）を組み、個人・集団の向上を図ろうと考えた。

この玉龍ユニット（図 11）は、年間行事の中から他者とかかわり合う場面が多く見られるものや生徒自身が各自の役割や責任を意識することで、集団の向上が図られる体験や活動を各学年の発達段階に応じて選び、必然性のある学習にしていくことを目指している。この玉龍ユニットに基づいて、道徳や特別活動を配置することで、体験活動と「学級活動」「道徳」との間につながりが生まれ、生徒は意識の中で「仲間と協力しながら取り組もう」「みんなで体験や活動を精一杯がんばろう」などと考え、他者と意欲的にかかわり合う姿が見られると考え実践している。特に、体育祭・合唱祭・長距離走大会では、学活等で学級の目標を設定し、生徒が自主的に朝練を計画し、学級単位で本番まで精一杯活動する姿が例年見受けられる。

さらに、各行事ごとに、体育班長や文化班長、パートリーダーが意欲的にリーダーシップを発揮し、行事の成功に向けて取り組む姿も見受けられる。

期	前期						後期						
月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	
1 年 生	体験	昇龍セミナー 玉中戦応援 昇龍祭(文化祭)			体育祭			合唱祭			長距離走大会		県内自主研修
	ユニット	【出会いと所属感】						【学級の絆】				【飛躍Ⅰ】	
	ねらい	入学後の不安を取り除き、一貫して教育校の一員であることの自覚を促す。						集団の中で一人一人を大切に、役割と責任を実感させる。				生徒相互の理解を深め、人間関係を学ぶ。	
2 年 生	体験	玉中戦応援 昇龍祭(文化祭)			体育祭			合唱祭			長距離走大会		九州自主研修
	ユニット	【所属意識】						【学級の絆】				【飛躍Ⅱ】	
	ねらい	学校・学年への所属意識を高め、円滑な人間関係を学ぶ。						学級の連帯感を高め、集団の質の向上を実感させる。				学年としての高まりを実感し、相互の人間関係を高める。	
3 年 生	体験	玉中戦応援 昇龍祭(文化祭) 職場体験学習			体育祭			合唱祭			長距離走大会		進級セレモニー 修学旅行
	ユニット	【交流】						【学級の絆】				【飛躍Ⅲ】	
	ねらい	最高学年としての自覚を促し、一体感のある人間関係を育む。						リーダー性の育成とともに、学級のまとまりを一人一人に実感させる。				中学生活の有終の美を飾るとともに、進級への前向きな姿勢を育む。	

※体験のゴシックの部分は、中学校・高等学校合同で実施

図11 「玉龍ユニット」各学年ごとの体験的な活動とユニット

V 研究の成果と課題

本校では、「ともに学び、自己を高める生徒を育成する教育課程の編成」という研究主題を設定し、教育課程の編成を進めてきた。これまでの研究の成果と課題については、以下の通りである。

1 研究の成果

- (1) 各教科の授業や道徳・特別活動を通して、学級内での話し合い活動が充実したものになり、積極的に意見を述べたり、論理的に説明したりできる生徒が増えてきた。
- (2) ICTを活用した授業が増えることで、生徒の思考の活性化につながるとともに、生徒のペア・グループでの意見交換が意欲的に行われるようになってきた。
- (3) 関東・九州の大学で実際の講義や研究室での実験に接する機会を得ることで、体験活動が充実し、自分の将来を真剣に考え高校生活へ向かう心構えを確立することに役だった。
- (4) 2学期制を試行することで、授業時数の確保につながるとともに、教師が生徒とかわる時間が増え、生徒の学習に対する支援・援助を充実させることができるようになってきた。
- (5) 高校内容の先取りやチューター制、M&Mの実施、中高合同の行事への参加などにより、学力の向上とともに学校への所属感の高揚にもつながった。さらに研修を重ねることでより充実した取組になると考える。

2 今後の課題

- (1) 各教科・領域における学習内容の理解と授業の活性化を図る効果的なICT活用のあり方について検討する。
- (2) 玉龍ユニットに関しては、体験活動を中心に、生徒にとっての必然性を重視した指導計画の修正・改善を進める。
- (3) 2学期制における考査のあり方について考え、より効果的に生徒の学習意欲を維持・向上できるような実施方法を検討する。
- (4) 7限授業や単位時間の弾力的な運用により、十分な授業時数は確保できたが、教科時数の増加や習熟度別授業の実施、高校の教員の乗り入れなどを考慮した時間割編成が難しくなる。
- (5) 新学習指導要領の全面実施にむけ、学校選択教科として実施してきた「日本文学」「芸術3教科」「自然科学」等の開設にあたっては検討していく必要がある。

【参考文献】

- 市川 伸一： “学力から人間力へ” ， 教育出版（2003）
市川 伸一： “学ぶ意欲とスキルを育てる” ， 小学館（2004）
小田 勝己： “学ぶに値すること” ， 東信堂（2005）
市川 伸一： “「教えて考えさせる授業」を創る” ， 図書文化（2008）